

【就業時刻こもごも】

就業時刻も自由な発想から

企業をサポートさせて頂くと、各社様各様、それぞれが色んな工夫をされていることに驚かされます。海外では、その奇抜さは群を抜くものがあります。



9時って・・・!?

あるモノ造り企業様を訪問するのに、アポに合わせて、約束の9時きっかりにベルを押しても、返事がないばかりか、人の気配

が全くありません。日を間違えたのかと、仕方なくホテルに戻り所用を済ませ、夜に寝ようとする、『何で来ないのだ!!!』と、お怒りの電話。なんと彼らは、朝の9時ではなく、夜の9時が一日の始まり時刻。昼は、騒音が多く、気が散るので、オフィスは夜だけ開けているとのこと。

好きな時間に働けばよし

日本でもエンタメなど、異彩、ユニークさが命の会社では昼夜反転の企業も出ています。最近では「21時にアイス」という夜間だけ営業するアイスクリームショップが、若者に大人気だそうで、モノ造り同様、就業時間にも自由な発想が必要なようです。

【インド人、ウソつかない】

データ・センター

シティバンクのディレクターとの話しが通じない。アメリカの金融業がこぞってデータ・センターを印度に移した時、

私は、低賃金、英語圏、適切な時差 の3点セットで印度が選ばれたと妄信していたのだが、これが、全く通じない。4, 5分話した後、やっと理解できたのは、『アメリカでセキュリティーと言えば9割が内部（行員）の犯罪防止。印度では、選民はモラルが高く、内部犯行はほぼゼロ状態に保て、セキュリティー・ソフトのコストは10分の1に減らせるから』とのこと。日本のセキュリティーはもっと高い筈と反論したら、『君は、日本の実情を知らなすぎる。メディアには表れない犯罪はインドの数倍ある』とカウンターパンチ。日本人（の殆ど）が知らないうちに、今後、永遠に、増

え続ける大きな大きなデータ・センタビ
ジネスを失っていたのだ。日本（人）の
信頼度は、我々の気が付かない間に、こ
こまで地に落ちていた。『印度人ウソつか
ない』は、冗談ではなかった。



【アメリカ人気質】

アメリカ西海岸

アメリカ西海岸に小さな研究所をスタート
させる直前、運悪くへボ野球で足首を骨折、
オープニングにはギプス、松葉杖の情けな
い姿で参加。オープニング挨拶を終え、3
0、40人位のパーティーが始まると、3
人が私の所に来てくれた。

一人目は、お医者さん、骨折状況を聞くと、
『それで一か月もギプスする必要はない。
一週間滞在したら、私の病院でギプスを外
してやるから来い』、

2人目は、中年の日焼けしたスポーツマン
タイプ、私にメモを手渡しながら『ここ
に行って、このメモを受付嬢に渡せ。無料で、プールを使わせてくれる。足首に負担がか
からない状況でリハビリしろ』、

3人目は、元 NASA の研究員、『月面着陸用のショック・アブゾーバの特許を NASA
から買い取り、リハビリ用の靴を売っている店が、丁度、この近くにある。今から一緒
に行こう』

生粋の日本人の私は、お申し出に感謝しつつも丁寧にお断り、1か月後に日本でギプス
を外し、3、4ヶ月のリハビリを強いられる。

ベンチャー起業率

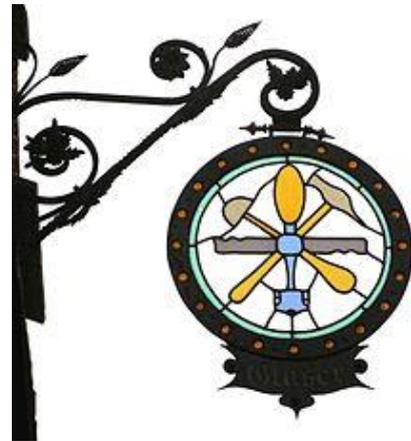
渡米前に日本では、『良い歳して野球なんぞ辞めなはれ。年甲斐も無くバカな真似は辞
めなさい』と言われ、時差8時間の彼の地では、まるで逆の反応。これが、日本でのベン
チャー起業率の低さの原因でない事を祈る。



【ドイツ人氣質】

アメリカに本社のあるグローバル企業、本社と欧州支社が同じ商品の出荷検査に生産委託を受けていた当方を訪問。アメリカの品質保証取締役グループは、2日目でテスト完了。同じ日の夕方、欧州グループは、全行程の10%もできてない。イライラした私は、本社の品質担当役員に、『最高責任者の私がOKしたのだから、欧州グループも私の指示に従い、本日をもって出荷検査完了とするよう彼らにご指示下さい』と願い出たが、彼は、ニヤッとウインクしながら、『彼等？ 彼らは、僕たちの会社じゃあないからね』

ドイツのギルド気質で、緻密さ、正確さを信条とする彼等は、格上であるはずの本社の言うことすら耳を貸さない。テストされる立場では、『つまらない詳細に拘るメンドウな奴ら』と思いながら、一方では、自分の信条はテコでも譲らない と言う彼等を羨ましく感じたのも正直な所であった。さて、我々は、どこまで自分の信条を守れるのか？ 儲けだけを重んじるなら、信条を守るどころの話ではない。



【ベンチャー企業の KFS】

権限移譲はされている

ベンチャー企業の成功には、色んな要素が必要ですが、カナダのベンチャー企業で、驚かされたことがありました。ブルー・ツウスの先駆け的な研究開発をカナダのベンチャー企業と共同開発した時の事、次期の契約更新に訪問したら、何かの手違いで社長は不在、出てきたのは、二十歳そここの若手技師、彼に訪問目的を説明し、社長が帰社したら連絡してくれるように依頼して帰ろうとすると、『何故帰るんだ。この件は僕が担当しており、内容、予算等必要事項は僕が責任を持ち、社長はサインするだけ。確かに、僕はサインは出来ないが契約内容更新は全て僕の責任で行う。社長のサイン入り書類は後で送るので、何も問題ない』とのこと。日本でこれと同じことが起きる日は何時になったらくるのだろうか？

対価はアップルで

約半世紀前のことで、アメリカでキャッシュ・レジスターの商売をしていた時、突然、

ソビエト（現ロシア）から『レジを数十万台注文したい。ついては、試験的に1000台頼む』とのこと。商談を進めると、支払い条件に、『支払いはappleで』とある。そんな貨幣単位があるのかな？と調べたが有るはずがない。相手に確認すると、『1000台の支払いはリンゴ〇〇トンで』と言う。要は、物々交換による支払である。当然、

数十万台の夢は露と消えた。

最近では、世界の富豪トップ1000人の富を合わせると、世界中の富の殆どとなるそうだ。『人、モノ、金（マネー）』と『金』は『人』より2ランクも下に格付けされる表現が四半世紀前までは有効だったが、今は、その真逆。『万物は流転する』と言われるが、このような変化を心から良しとする人は、ほんの一握りのハズ。元々、『金』は、物々交換の等価性を保証する手段だったはず。しかし、今では、我々は、『金』に対して、城、王宮、教会に感じると似た畏敬、憧れの感を抱く



ようになっている。富の異常な偏りの現状に諸手を挙げて賛同はしない一方で、個人としては金へのあこがれは否定できない。人の性のなせる業とは言え、金のために人は殺され続けており、世界平和は遠のくばかり。

今となると、リンゴで支払えた時代の感覚が懐かしくさえ感じる。